

## 多読教材による英語力向上についての考察

吉野 美智子

外国語教育において、大量のテキストを継続的に読む多読は、リーディングだけではなく、リスニング、ライティング等でも学習者の英語力が上がることが実証され、世界各地で実施されている。<sup>1</sup> 通年の多読授業では後期になると自発的に高いレベルの本を選ぶ傾向が、どの英語力レベルの学生にも見られ、多読初期に平易な本を十分に読むことで選択する本のレベルを上げることが容易になっていることが報告されている。<sup>2</sup> 読書対象のテキストは多岐に渡り、また従来の授業と異なり、学生自身が読書するテキストを自分の興味に従って選ぶ。そのため、大学でのリメディアル授業で英語を苦手とする学生が、平易で様々な多読教材に触れ、大量に読むことで、その英語力が飛躍的に改善されている。<sup>3</sup>

筆者が最初に多読授業を行なったのは関西の私立大学で、非英語系を専攻とする平均40名のクラスであった。ほとんど全ての学生が多読を未経験であるため、最初、そして時々の指導が必要だった。また多読は授業外で学生が個々で行い、授業では教員がそれぞれ自由に選択したテキストを用いた。多読教材は当初はOxford, Cambridge, Penguin, Macmillan といった出版社からの外国語学習者向けの多読用に作られたテキストのみだったが、次第にOxford Reading Treeなど、英語圏の児童用に作られたシリーズや、Scholastic などの厚みのある多読教材が加わった。

多読が成績配分に占める割合は30%で、規定読書量がページ数で設定されていた。規程以下になると、単位取得が困難になるため、多読が必須になるようになっていた。規程ページ数は春学期が400ページ以上、秋学期は600ページ以上読むことが求められるが、本の選択は学生に委ねられているため、自分の英語力、興味にあったものを継続的に読むことを勧めた。

学生は一冊読む毎にその本のあらすじ、感想を記入したBook Reportを教員に提出した。また自分でも読書のペースを確認するためにも、読んだ本のタイトル、読んだ日、本のレベルとページ数を記録していくReading Logを個別につけ、学期半ばと最終に教員に提出することが統一して決まっていた。これにより、教員は学生が読むレベル、頻度に対して指導を行うことができた。

どのような本を読み始めるべきか、という指導は1回目の授業で行なったが、多読未経験の学生がほとんどであるため、学生への指標として、Penguin Readers付属のプレイズメントテストを用いた。このテストはPenguin社の多読教材が各レベルで用いている文法を問うもので、一つの文に空欄が一つあり、そこへ3から4つの選択肢が設定され、適切なものを選ぶ、というものである。これを第一回目の授業で行い、自分がどのレベルから読み始めれば良いのか、大体の目安としてもらった。多読によって英語力が変化したかを学生本人にも知ってもらうため、同じプレイズメントテストを春学期最終授業、秋学期最終授業でも行った。その結果、ほとんどの学生が多少の伸びを示し、下がる学生は非常に稀であった。

この大学では、同一の多読教材をクラス分用意し、授業で用いることができるような取り組みもされていた。レベルもHeadwords 250語から1000語のものまでがあった。それぞれに本に対し、内容読解やWriting等の教材が作成されていた。それらの教材により、学生はただ読んでその内容を記述することから、それを元に自分の意見を組み立てる、ということへとつながるようになり、英語で書く、ということに次第に慣れていった。

---

<sup>1</sup> リチャード・R・デイ、ジュリアン・バンフォード(荒牧和子、池田庸子、上岡サト子、川畑彰、北風文子、内藤満、福屋利信、松本真治、吉村俊子、渡邊慶子訳)『多読で学ぶ英語—楽しいリーディングへの招待』(東京:松柏社、2007年)45ページ。

その後、この大学ではカリキュラムの変更で多読を主眼とした授業はなくなったが、関西の別の私立大学では数年前から成績配分に多読を取り入れている。コミュニケーションを主眼とした英語クラスはプレースメントテストによってクラス分けされ、下位のクラスで多読を成績配分に含めることが教員に推奨されている。配分は10%程度で、多読自体はこちらも授業外で行う形である。英語を比較的苦手としている学生に向けて対象を絞っている点が重要だが、この大学での多読教材は英語を学ぶ外国人用に作られたOxford, Cambridge, Penguin, Heinemannといった出版社のシリーズになっており、英語圏の児童用に作成されたReadingTreeシリーズなどはない。また初歩のレベルの本自体も限られているため、秋学期に入ると易しいレベルを読み終えてしまっており、レベルを上げるしか選択肢がないが、一つ上のレベルでも読み進めるのに苦労している学生もいる。

吉澤らによる多読授業の実験では、プレースメントテストによるクラス分けを行い、多読授業と総語数約8000語からなる文学作品原文短編集を用いた授業での英語力の伸びについての研究を行い、多読下位クラスでの伸びを実証している。<sup>4</sup>この実験での多読授業は、前半20-25分に同一のテキストでスピード・リーディングまたは音読を行った後、そのテキストについて内容読解問題を解き、解答確認後、音読をした後は、各自で自分が選んだ多読教材を黙読する。

日本でも多読教材が授業に取り入れられ始め、毎週の授業時間の大半に多読を行うという授業がなされている。しかし、筆者が担当している授業ではカリキュラムの構成上、授業全体で多読を行うことはできない。そのため、上記の私立大学でのように成績配分の10%を自習による多読に充てることにした。現在多読を成績配分に取り入れている私立大学では英語を学ぶ外国人用の多読教材だけでなく、Reading Treeシリーズなども充実しているため、これらを活用することにした。またこの大学でもプレースメントテストで4つのレベル分けがされ、それぞれのクラスで文法、リーディング、ライティング、コミュニケーションに主眼を置いた4種類の英語の授業が必須科目として行われている、筆者はその中で文法を主眼とした授業で多読を取り入れている。初年に担当したのは春学期には一年生、二年生のそれぞれ下位から二番目のクラスであった。筆者がこれまで使用していた、一冊毎に記入提出するBook Reportを使用し、冊数もReading Treeシリーズであれば30冊以上、それよりも語彙、ページ数の多いBookwormsなどの場合は20冊と設定した。

筆者が使用したBook Report (表)

(裏)

BOOK REPORT No. \_\_\_\_\_

Book Title: \_\_\_\_\_ Name: \_\_\_\_\_

Publisher: Oxford / Penguin / Cambridge / Heinemann(Macmillan)

Date Checked-Put: \_\_\_\_ / \_\_\_\_ / \_\_\_\_ Date Returned: \_\_\_\_ / \_\_\_\_ / \_\_\_\_

Number of Pages: \_\_\_\_\_ Level: \_\_\_\_\_

Reading Time: \_\_\_\_\_ hours

Comment on the book. Circle One.

Easy	1	2	3	4	Difficult	Short	1	2	3	4	Long
Like	1	2	3	4	Dislike	Interesting	1	2	3	4	Boring

Any message! [感想、読んでいる本の中のわかりにくい表現など]

\*結末までのあらすじを全ての行を使って、日本語で書いてください。(不自然に両端を開けない事！短編集は全てのあらすじを書いてください。条件を満たされていない場合は、書き直しになります。)

What is the best or the worst part? \*全ての行を埋めてください。

Write the most impressive sentence from the book.

<sup>2</sup> Atsuko Takase and Kyoko Otsuki, "The Impact of Extensive Reading on Remedial Students," (『教養・外国語教育センター紀要』2巻1号、2011年) 343ページ。

<sup>3</sup> 吉澤清美、高瀬敦子、大槻きょう子 「多読は日本人英語学習者の文法力向上にどのように影響するか」(『日本多読学会紀要』10巻、2017年) 11-12ページ。

<sup>4</sup> 吉澤清美、前掲論文、10-11ページ。



使用した。読書対象がReading Treeシリーズであるため、使用したテストはReading Tree中程度以上と同じくらいのレベルの文法、語彙であるstarter、それよりも難易度は上がるstage 1, stage 2のものを使用した。

結果は以下のようになった。

### Bookworms placement test

一年生					
試験日	第一回目授業		最終授業		読書冊数
	Starter (20問)	Stage 1 (30問)	Starer	Stage 1	
	17	15	20	-	22
	15	18	18	12	22
	13	18	12	15	25
	12	9	13	18	26
	10	10	13	13	39
	17	16	11	19	49
	11	11	9	-	55
	15	12	14	15	57
	12	11	11	13	58
	17	17	17	17	67

二年生					
試験日	第一回目授業		最終授業		読書冊数
	Starter (20問)	Stage 1 (30問)	Starer	Stage 1	
	11	2	12	16	3
	4	9	9	10	26
	15	21	10	18	54
	13	6	11	16	61
	13	14	14	7	64
	16	17	10	15	65
	9	10	8	9	84

設定した総冊数144に到達した学生はなく、一番読んだ学生であっても84冊で、平均46.5冊となった。2年生で読書冊数3冊となっている学生はBook Reportを度々紛失しており、実際の冊数は数十冊程度には至っている。Bookwormsのプレイスメントテストの結果からは、最高冊数を読んだ学生もテストの正答数が微減しているなど、読書冊数との関連が明確に見いだせるとは言い難い。読書冊

<sup>5</sup> 古川昭夫他編著『目指せ100万語 英語多読完全ブックガイド』(東京:コスモピア株式会社、2010年)26ページ。

数の少なさと、授業での読書以外ほとんどしない者がいるなど、読書間隔が開いてしまうことも課題として考えられた。

二年目も同様に文法を主眼としたクラスで実施した。今回もレベルは一、二年生とも同じで、プレイスメントテストで下から二番目のクラスで行った。今回は多読開始前のプレイスメントテストはエジンバラ大学の応用言語教育機関が多読用に開発したクローズド・テスト、Edinburgh Project on Extensive Reading Placement/Progress Testを用いた。12種類の物語の抜粋から成り、段階的に英文の難易度があがっていく。前回まで使用したBookwormsのプレイスメントテスト同様、物語からある一部を抜粋し、問うのは同じだが、選択方式ではなく、空欄箇所に単語一語を自分で考えて解答する、という形式であるため、難易度は上がるが、偶然による正答の可能性をより排除しやすくなると考え、使用した。また前回使用したBook Reportは自分でレベル、題名を記入する形式だったため、レベルを上げながら読むように指導したものの、図書館に行った時に貸し出し可能な本を借りるため、実際の所蔵冊数に至るものがなく、また読書する本のレベルの上下が頻繁に起こってしまった。そのため、今回からはReading Treeで全ての所蔵図書タイトルとレベルを予め記入した仕様に変更した。また絵のみで、地の文がないレベル1は読書対象から除外した結果、総数は126冊となり、Book ReportはA4に両面で印刷したものの合計が7枚になった。学生が紛失することを避けるため、一度に7枚全てを配布するのではなく、半分に分けての配布を行った。その結果、紛失する学生はほとんど出なかった。

Reading TreeシリーズのみのBook Report(改訂版)

Reading Tree: Book Report		
No.1	NAME	
TITLE	Stage	The impressive line
Plot		
EX) The Cold Comfort Farm	6	
Floraが機能不全に陥っていた農場とその住人を再生させていく。		
The Dream	2	
The Go-kart	2	
What a Bad Dog!	2	
A New Dog	2	
New Trainers	2	
The Toys' Party	2	
Kipper's Birthday	2	
Spots!	2	

結果は以下のようになった。

一年生																													
Book Report提出日			合計 枚数	EPER 4/12												合計	EPER 7/19												合計
6/28	7/5	7/26		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
			0	8	2	1	2	6	3	1	0	0	4	0	2	29	5											5	
			0	4	3	3	0	3	0	3	0	0	1	1	2	20	4	3	3	2	3	1	0					16	
			0	9	6	6	7	6	5	3	0	0	4	1	2	49	10	8	5	4	3	8	4	1		5	1	0	49
3			3	9	6	5	5	2	5	4	0	1	1	0	0	38	10	7	7	7	6	11	1					49	
		3.5	3.5	8	5	4	2	5	3	2	1	1	2	0	3	36	8	7	4	6	1	7	4	0				37	
		4.5	4.5	6	4	3	2	2	1	0	0	0	0	0	1	19	6	7	3	4	2	4	1	2	2	1	2	1	35
		4.5	4.5	9	3	7	3	4	7	4	1	0	2	0	1	41	8	7	4	3	6	6	5	1	3			43	
		5	5	8	3	4	2	4	3	1	0	0	3	1	1	30	7		3	1	3	4	0	0	0	3	1	2	24
2		4	6	9	6	5	4	5	5	2	1	0	4	1	1	43	8	7	7	4	5	5	4	1	0	4	2	3	50
2	2	2	6	6	5	5	5	4	4	5	1	1	3	1	0	40	6	9	9	7	6	5	5	0	2	1	1		51
5		2	7	4	2	4	2	2	4	1	0	0	1	0	0	20	5	3	5	3	3	4	1	0	0	0			24
2	1	4	7	9	4	9	7	5	5	3	0	0	0	0	2	44	9	7	4	3	5	3	1	0	0	0	0	1	33

二年生																			
Book Report提出日					合計 枚数	EPER 4/13						合計	EPER 7/27						合計
6/29	7/13	7/20	7/27	8/2		1	2	3	4	5	1		2	3	4	5			
					0	8	4	6	2	4	24	8	3	5	4	5	25		
1				3	4	7	2	5	3	5	22	4	3	3	3	3	16		
4	2	1			7	10	4	2	5	4	25	9	6	6	1		22		
2		1	1	3	7	5	2	2	3	4	16	8	4	7	5	4	28		
			3	4	7	8	4	3	4	6	25	8	5	3	3		19		
2	2	1	2		7	6	6	4	3	4	23	8	5	7	7	5	32		
2	2		1	2	7	7	4	5	2	2	20	6	2	5	4	5	22		
				7	7	5	7	6	1	6	25	9	7	8	4	7	35		
				7	7	8	6	5	4	5	28	7	8	6	1	2	24		
				7	7	8	7	7	7	7	36	8	5	8			21		
				7	7	5	3	3	5	4	20	3	5	5	2		15		

一年生に関しては最終の多読プレイズメントを期末試験の前週に行うことができたが、二年生は最終のプレイズメント実施が定期テストと同時期に行うことが多く、その結果、プレイズメントテストに集中することができない、また時間が最初のテスト時のように十分取ることができない、という問題が発生した。そのため、多数の学生が6つ目以降の問題に進まなかったため、二年生に関しては5つ目までの抜粋問題の結果を表示した。

一年生はBook Report未提出の学生は変化なしか低下しているのに対し、3枚以上読んだ学生の大半の点数が上昇している。二年生ではプレイズメントテスト行った最終授業後に駆け込みで7枚分を読んだ学生が多く、多読の影響がテストの数値から計ることが困難である。しかし、一年生の例からも、多読の効果は見られる、と言えるだろう。週一回の授業の最初だけ行う多読であっても、学生は空き時間に読書を行う習慣がついたことが分かる。

ここでは多読を実施したクラス内でのみの比較になっているので、多読がどれほど英語力に影響を与えたのかを断言し難い。そのため、今後の課題として、多読を行っていないクラスとの比較を行なっていきたい。

#### 参考文献

- [1] Atsuko Takase and Kyoko Otsuki (2011) “The Impact of Extensive Reading on Remedial Students,” 『教養・外国語教育センター紀要』 2巻1号。
- [2] デイ、リチャード・R、ジュリアン・バンフォード (2007) 『多読で学ぶ英語—楽しいリーディングへの招待』(荒牧和子、池田庸子、上岡サト子、川畑彰、北風文子、内藤満、福屋利信、松本真治、吉村俊子、渡邊慶子訳) 東京:松柏社。
- [3] 古川昭夫、神田南編著、黛道子、佐藤まりあ、西澤一、宮下いづみ、畑中貴美著(2010) 『目指せ100万語 英語多読完全ブックガイド』東京:コスモピア株式会社。
- [4] 吉澤清美、高瀬敦子、大槻きょう子 (2017) 「多読は日本人英語学習者の文法力向上にどのように影響するのか」(『日本多読学会紀要』10巻)